

朝鮮・中国の伝統的友好関係強化と対朝鮮包囲網の瓦解

「天安」号沈没事件を契機に行われた米国や南朝鮮、日本の追加制裁や朝鮮東海と西海での米「韓」合同軍事演習などによって、一時朝鮮半島は一触即発の危険な状態に陥ったが、これに対処すべく、朝鮮と中国、ロシア間の連携が強まった。金正日総書記の 5 月に次ぐ 8 月の中国東北地方の電撃訪問に際し、中国の胡錦濤国家主席はわざわざ長春まで出向き朝中首脳会談を行った。この会談の結果は、10 月 2 日に北京で朝鮮労働党代表団と会見した際に胡錦濤主席が語った次の言葉に集約されている。「われわれは金正日総書記同志を首班とする新しく選出された朝鮮労働党中央指導機関とともに『伝統継承、未来志向、善隣友好、協調強化』の精神にしたがって中朝親善協調関係を発展させ地域の平和と安全を守るために積極的に努力する」。一方、8 月 15 日に平壤で行われた朝鮮の日本植民地支配からの解放 65 周年を祝う式典で、ロシア政府代表団の団長バザルギン地域発展相は「共通の敵との戦いで築かれた友好と同情の気持ちは不変だ」と述べた。また、朝鮮で朝鮮労働党代表者会が行われた直後の 9 月 29 日に中国の胡錦濤国家主席とロシアのメドベージェフ大統領は「第二次世界大戦終結 65 周年に関する共同声明」を発表し、ナチスと日本軍国主義の「2 つの勢力を阻止した人々の勲功を永遠に忘れない」としながら、「共に公正で合理的な国際秩序を確立して、戦争や衝突を防止するために、引き続き努力していくことを決意」した。これらの動きは、朝、中、ロの 3 カ国が政治・軍事的、経済的に相互協力を強化して、米・「韓」・日の軍事同盟の挑戦に対処していこうとしていることを示唆している。そうした中、10 月 7 日にウォールストリート・ジャーナルとのインタビューで「米国政府高官が来年 1 月まで北朝鮮との 2 国間対話を再開できることを期待している」と述べた。また同日、キャンベル米 국무省次官補はソウルで「われわれは南北間に対話と融和の信号が存在していると信じ、そのプロセスを奨励している」と語った。朝鮮に対する米国主導の包囲網はすでに瓦解しているばかりか、東北アジアにおける政治・軍事的、経済的関係の力学が劇的に変化し始めている。日本がこのことに気づくのはいつのことだろう。

— 目次 —

寄稿 北朝鮮は交渉を望んでいる	ジミー・カーター 元米国大統領	1
寄稿 金正日国防委員長訪中の意味と今後の朝鮮半島情勢	朴敬淳 新世界研究所副所長	2
北朝鮮の水流を吟味する	ドナルド・グレッグ 元駐南朝鮮米国大使	4
日朝正常化こそ日本の生き残る道だ	菅沼光弘 元公安調査庁第二部長	6
米国は北朝鮮への関与の可能性を検討している	ニューヨーク・タイムズ	7
★ トピックス :		
◆ アントニオ猪木さんが訪朝、「親善勲章」受賞		9
◆ 日朝ピョンヤン宣言 8 周年 「在日朝鮮人の権利確立と新しい日朝関係を求める集会」		9
◆ 東京で「高校無償化からの朝鮮学校除外に反対する全国集会」		10
★ ドキュメント :		
◇ 朝鮮民主主義人民共和国政府の談話・声明		10
◇ 朝鮮半島日誌 (2010. 8. 8 ~ 2010. 10. 8)		19

寄稿 北朝鮮は交渉を望んでいる

ジミー・カーター 元米国大統領

ニューヨーク・タイムズ 2010 年 9 月 13 日

私は最近の北朝鮮と中国への訪問で、ピョンヤンが米国と南朝鮮との包括的な平和条約締結と朝鮮半島非核化についての交渉を再開したいとの明瞭で強いメッセージを受けた。

1994 年に初めて、米国と当時の北朝鮮指導者金日成氏によって確認され、2005 年 9 月の多国間合意により再確認された諸合意は 16 年間ほぼ不変のままである。

その基本条項は次の通りである：①兵器級プルトニウムの生産が容易な北朝鮮の古い黒鉛減速炉と関連施設、生産物は国際原子力機関（IAEA）の査察の下に無能力化されなければならない。②原子炉の閉鎖中、北朝鮮に新たな発電施設が建設されるまで、米国は重油または電力を供給しなければならない。③米国は、北朝鮮に対する核攻撃または他の軍事的攻撃の脅威を与えないことを担保しなければならない。④米国と北朝鮮は、政治・経済的関係の正常化と朝鮮半島を包括する平和条約に向けて努力しなければならない。⑤北朝鮮、南朝鮮、日本は互いにより良い関係が追求されなければならない。⑥すべての関係諸国は、エネルギー、貿易、投資に関して互いに協力を強化しなければならない。

クリントン政権が到達した包括的合意はジョージ・W・ブッシュ大統領によって 2002 年に否認された。しかし、北朝鮮が燃料棒を再処理し 2006 年には核実験をしたにもかかわらず、米国、南朝鮮、中国、日本、ロシアとの会談では好ましい進展が見られた。

しかし以来、状況は悪化した。2009 年に対話は止まり、同年に北朝鮮が 2 度目の核実験を行い、長距離ミサイルを発射した後、国連はピョンヤンに制裁を科した。北朝鮮も北南の離散家族の再会を止めた。

北朝鮮が今年の 1 月、自国内に進出した罪で告訴した米国人アイジャロン・ゴメス氏を拘留し、8 月に南朝鮮の漁船乗組員らを拘留したことで、緊張はさらに高まった。

しかし、いまピョンヤンからは、交渉を再開し非核化と平和への努力をうたった上述の基本条項を受け入れる熱いシグナルが示されている。

北朝鮮当局は 7 月、ピョンヤンを訪問し北朝鮮の指導者である金正日氏に会うよう、私を招待しゴメス氏の解放も担保した。私を招待した人たちは、私以外に誰が求めてもゴメス氏の釈放には応じられないと言っていた。彼らは、金日成が 1994 年に亡くなる前の最後の公務となった非核化と平和に関する合意の復活に私が役立つかもしれないという望みをもって私の訪問を求めたのであった。

私はホワイトハウスにこの招待について伝えたが、私の訪朝の許可は 8 月中旬に出た。それは北朝鮮が、ゴメス氏を病院から刑務所に戻し、金正日氏は私に会うことができないことを明らかにした後であった。（私は金氏が中国に行ったことを後で知った。）

ピョンヤンで私はゴメス氏の解放を求め、その後、彼の再審、赦免、釈放まで 36 時間待たなければならなかった。この間、私は北の議会の常任委員会委員長である金永南氏や外務省副相であり 6 者会談の北朝鮮首席代表である金桂官氏と会った。両氏とも私が前回行った金日成氏との会談に参加していた。

彼らは私が公式の資格をもたず米国政府を代表する話ができないということを理解していた。したがって、私は彼らの提案を聞き質問をし、帰国後は彼らのメッセージをワシントンに伝えた。

彼らは、10 年前、当時の南朝鮮大統領の金大中氏や日本国総理大臣の小泉純一郎氏との間で進展した良好な関係を拡大したいと言っていた。

彼らは、不当な制裁や核攻撃対象国に北朝鮮を含めたこと、南朝鮮との挑発的な合同軍事演習など、米国の最近のいくつかの行動について懸念を表明した。

それでも、彼らは平和と非核化を望む自分たちの気持ちを誇示する用意があると述べた。彼らは 6 者会談について「死刑宣告を受けたが執行されていない状態」と表現した。

訪朝した次の週、私は北京を訪れたが、そこで中国の指導部は、私がピョンヤンに滞在中、金正日氏も同じような趣旨を彼らに伝えていたことを知らせてくれた。その後、彼は南朝鮮漁船乗組員たちを解放し、離散家族再会事業の再開を提案した。中国は、それを北朝鮮の重要性を帯びた明確なサインと見て、6 者会談再開を積極的に促進させようとしている。

朝鮮半島の和解はアジアの平和と安定にとってきわめて重要であり、それは長い間未解決のままになっている。北朝鮮からのこれらの肯定的なメッセージは、遅れることなく積極的に追求されなければならない、そのプロセスを注意深く十分に確認しながら一步步進めるべきである。（“North Korea Wants to Make a Deal,” By JIMMY CARTER, New York Times, September 15, 2010）

寄稿 金正日国防委員長訪中の意味と今後の朝鮮半島情勢

朴敬淳（パク・キョンスン）新世界研究所副所長

統一ニュース 2010 年 9 月 7 日

金正日国防委員長の訪中の核心は「先軍」と「平和」

金正日国防委員長の 3 ヶ月ぶりの中国再訪問について様々な説が入り乱れている。訪中しなければならない差し迫った状況が生じたのは明らかだ。しかしそれは、北内部の経済的困窮でもなく、後継体制認知のためでもない。

すでに 5 月の首脳会談で経済協力に関する合意は成立していたし、経済支援を緊急に協議しなければいけない状況もなかった。

まして、後継体制問題は協議事項でなく内政に関する通知事項で、首脳会談で論じる必要はまったくない。そのために首脳会談を開催するということは常識外であり、北の体制に対する無知の産物である。

ならば差し迫った状況とは何だったのか？それは韓米両国の動きのためである。両国内では「天安」号事件を機に対北強硬対決勢力が大手を振って、朝鮮半島情勢を極端な対決状態に追い込んだ。

しかし、このような路線は失敗せざるをえない、雲をつかむような夢に過ぎない。強硬勢力の脅迫に両国内の合理的な保守主義者は大きく声を出せずにいたが、無謀な戦略に対する彼らの不満は沸きあがり爆発寸前の状況になりつつあった。

オバマ政権内の強硬勢力がカーター前大統領の平壤訪問を許したのも、このような状況のためだ。すなわち韓米両国の強硬勢力は対北対決政策をあきらめる意志がまったくないが、彼らの対決政策は内外の反対によって崩れる一歩寸前の状況にあるということが、現在の朝鮮半島情勢の核心である。

朝・中両国はこのような朝鮮半島情勢に対する共同認識に基づいて緊急に首脳会談を開催することになったといえる。

今回の国防委員長の訪中には朝鮮側より中国側の要求と立場の変化が大きな役割をはたした点に注目する必要がある。

中国は今まで、朝鮮半島問題に対してバランス外交を駆使してきた。朝・中の伝統的友好協力関係を維持、発展させる一方、米・中の戦略的協力関係も重視する政策に基づいて朝米両国のどちら側にも偏らないという原則を堅持してきた。

しかしこの数年間、とくにオバマ政権の登場以来、米国は米・中戦略対話で合意した事項

を守らず、中国を無視しながら韓・米・日三角軍事同盟を強化しているばかりか、中国を軍事的に圧迫する行動を取るに至っている。

米国のこのような態度に対し中国は深刻な裏切と感じ、米国との戦略的協力関係よりも朝鮮との伝統的協力関係を重視する方向に向かわざるをえなかった。この点が最近の中国の戦略的歩みの変化の様相であり、このような変化の産物が国防委員長の訪中と関連している。金正日国防委員長は中国側のこのような変化と要求に応じて中国を訪問することを決断したといえる。

金正日国防委員長の訪中目的は大きく三つに整理することができよう。

第一に、首脳会談を通じて韓米の戦争攻勢を破綻させるための主動的な平和攻勢(先軍に基づいた対話と平和路線)を内外に示すためである。

韓米の先核放棄路線(武装解除路線)に対抗して先軍路線を守るということ、このような原則を堅持しながらも朝鮮半島の平和のための対話と交渉(6者会談)を積極的に追求していくつもりであるという点を明確にし、中国側もこれを了解したと見られる。

胡錦濤主席は朝鮮半島の緊張緩和のために朝鮮が傾けてきた積極的な努力を尊重し支持することを明らかにすることで、このような立場に対する支持を明確に表明した。

とくに両国は昨今の米国の軍事行動は、朝鮮半島だけでなく中国を含めた東北アジアの平和に対する重大な脅威になっているという点を共有し、過去の抗日大戦で朝・中両国の先代たちが共に銃を取り闘った伝統を継承し、朝鮮半島と中国を含んだ東北アジアの平和のために共同闘争を繰り広げることに合意したことが極めて重要である。

第二に、継承を準備する時期に継承の原則を内外に明らかにするためである。

金正日国防委員長が今回中国東北地方を訪問したことには色々な理由があるだろうが、金日成主席の抗日革命闘争の史跡を巡礼したことも重要な理由の一つであろう。

それは個人的なものではなく国防委員長をはじめとする北の党・政・軍の高位級指導者たちが共に金日成主席の革命遺跡を巡礼したことで重要な国家的行事となり、これからの北の後継体制の構築の基本精神と原則を明確に示したことになる。すなわち、金日成主席が抗日大戦を始めたその精神と原則を一寸の違いもなく継承、発展させていくという決然とした意志を表明したことであり、米国にはどんな妥協も屈従もありえないという政治的メッセージを送ったのである。

第三に、朝・中経済協力関係を深化、発展させることも重要な目的の一つである。

現在の朝・中経済協力関係は新しい段階に入っている。中国は過去、米国を意識して朝・中経済協力拡大に非常に慎重な態度を堅持してきた。とくにブッシュ政権の初期には最小限の経済協力にとどまり、実質的に米国の経済制裁政策に同調した。

しかし最近、このような中国の立場に戦略的変化が起こっている。中国は朝鮮半島非核化と朝・中経済協力関係の発展を分離し、非核化進展の有無とは関係なしに経済協力を強化していく方針を固めた。いま中国では東北地方開発問題が切迫した国家的施策として浮上している。東北地方開発で北との経済協力は必須で切迫した問題である。北と連係して開発すればシナジー効果を期待できるが、単独開発だけでは開発効果を十分に生かすことができず難関が生じつつある。とくに物流輸送問題は非常に切迫した問題である。この点で朝・中経済協力拡大は北にだけでなく中国にも切迫した課題になっている。そのために過去、米国の顔色をうかがう慎重な態度を捨て、朝・中経済協力を果敢に拡大していくことにしたのである。

北としても中国東北地域と北の豆満江沿岸地域との連係で共同開発することを拒む理由はない。両国はこのような共同の利益に基づいて去る5月、経済協力推進について原則的に合意し具体的実践計画まで用意した。金正日国防委員長は中国東北地域の訪問を通じて「5月合意」を加速化する推進力を形づくろうとしたのだろう。

金正日国防委員長訪中以後の朝鮮半島情勢の展望

国防委員長訪中以後、朝鮮半島情勢が揺れ動いている。委員長の訪中で朝鮮半島を対決と戦争に追い込んだ対決勢力は決定的な打撃を受け、朝鮮半島の平和に有利な局面が生まれている。

米国の強硬派は国防委員長の訪中に対して神経質な反応を見せながら、北に対する制裁方針を発表したが、誰もそれが腹いせ以上の実際的な効果を発揮するとは思っていない。制裁を敢行した当事者たちでさえ、その効果を明らかにできないでいる。

それとは逆に、武大偉代表の韓、米、日訪問が焦点となっている。武大偉のワシントン訪問以後、中・米両国は 6 者会談の早期再開のために努力することで合意した。

だが、韓米両国のこのような変化の兆しが欺瞞的なものなのか、対朝鮮政策に対する前向きな検討の次元のものなのかは明確でない。

現在、金正日国防委員長の訪中で制裁と戦争を扇動する強硬勢力が窮地に陥り、対話と交渉の局面を模索する平和勢力に決定的に有利な局面が醸し出されている。このような有利な局面を生かせるかどうか、今後の朝鮮半島情勢がかかっているといえる。

北朝鮮の水流を吟味する

ドナルド・グレッグ 元駐南朝鮮米国大使

ニューヨーク・タイムズ 2010 年 8 月 31 日

*ドナルド・グレッグ氏は 1982 年から 88 年まで、ブッシュ副大統領(当時)の国家安全保障担当補佐官を務めた後、1989 年から 93 年まで駐南朝鮮米国大使を歴任。現在は米コリア・ソサエティー名誉議長

ジミー・カーター元大統領がピョンヤンを訪問し、不法入国の罪で 8 年の労働教化刑を宣告された米国市民のアイジャロン・マーリ・ゴメスの解放に成功した功績は大きく評価されるべきである。

オバマ政権は、カーター氏は市民としての個人的な使命を担っていたのであり、ホワイトハウスからのメッセージを携えていなかったとわざわざ強調した。北朝鮮もカーター氏の出発に先立ち、彼が北朝鮮指導者である金正日氏と会うことはできない旨を明らかにしていた。事実、カーター氏の到着後、金氏は中国へと発った。

しかし、カーター訪朝は、とくに今年 3 月の南朝鮮軍艦沈没事件以来、ホワイトハウスがピョンヤンに向けている敵意を和らげるのに役立つかもしれない。

バラク・オバマ大統領は、政権に就く際に引き継いだ困難な問題を突きつけられたので、指導層が不明瞭で怒りっぽいと見られていた北朝鮮との取引に高い優先度を与えなかった。例えば、ホワイトハウスが金正日氏の末息子であり後継者として有力視されている金正恩氏を米国に招待するなどということは真剣に検討されなかった。

そのかわりオバマ大統領は、米国の強固な同盟国の力強い指導者と見なした南朝鮮の李明博大統領との強固な関係をつくり、ピョンヤンとの取引に関しては、ソウルにペースを任せることで満足していた。

李氏の対北朝鮮政策は 2 人の前任者である金大中、盧武鉉氏よりもはるかに強硬であった。両前任者たちは、金正日氏に会っている。これとは対照的に李氏は北への経済援助をカットし、ピョンヤンの政治的譲歩を得ようと圧力を強化した。

しかし、1 年前までソウルとピョンヤンの関係改善は可能であるかに見えた。2009 年 8 月、対北朝鮮関与の「太陽政策」の旗手である金大中元大統領の葬儀に派遣された北朝鮮弔意訪問団が李大統領によって温かく迎えられた。その後 2009 年内に北朝鮮は北南首脳会談を提

案し、故金大中大統領夫人をピョンヤンに招待した。

しかし、このような北朝鮮の融和姿勢が考慮されている最中、3月26日に朝鮮半島沖の黄海で南朝鮮海軍の哨戒艦「天安」が不可解な状況下で爆発、沈没した。その場所は、北朝鮮と南朝鮮の海軍艦艇がしばしば衝突する場所である。

南朝鮮当局の調査によって、南の軍艦は北朝鮮の潜水艦による魚雷攻撃を受けて沈没したとの結論が出された。米国はこれに同調し、米国内では「天安」沈没が北朝鮮の悪行の証明とみなされるようになった。

米国は北に対して追加制裁を科し、海と陸において南朝鮮と合同で過去にない規模の軍事演習を行った。

南朝鮮の主要外交官のひとりには私にこう述べた。「李政権は南北にかかるすべての橋を焼き払ってしまい、出口のない強硬政策を取ってきた。現在の北南関係は典型的なチキンゲームのようである」。

しかし、問題は「天安」が北朝鮮によって沈没させられたということにすべての人が同意していないということである。ピョンヤンは一貫して関与を否定しており、中国とロシアは北朝鮮を非難する国連安全保障理事会の決議に反対した。

6月にはロシアが、南朝鮮の北に対する非難の根拠となった証拠を検証するために、海軍専門家チームを派遣した。このロシア専門家チームの報告書は公表されていないが、南朝鮮の新聞による詳細な報道は、ロシアが「天安」沈没は魚雷ではなく機雷による可能性の方が高いと結論づけたことを明らかにした。ロシアはまた、「天安」は爆発の前に座礁し魚網にからまり、それが機雷を引き寄せ船を爆発させたようだと言った。

南朝鮮はロシアの結論について、いまだ正式な言及をしていない。なぜロシアの報告が公表されていないのか、信頼できるロシアの友人に尋ねたところ、彼は「なぜなら、それが李明博大統領に相当な政治的打撃を与え、オバマ大統領も困らせるからである」と答えた。

ワシントンの政府高官による最近の声明は、「天安」沈没について、新たな政権移譲を準備している金家支配一族がその強さを示すために意図的に引き起こしたと非難している。

しかし、軍事演習、経済制裁、非難がどのようなインパクトを与えようとも、金正日体制の崩壊を望むワシントンとソウルの人々は失望するであろう。そして中国は崩壊が起こらないようにするだろう。

中国にとって、核武装した北朝鮮は好ましくないかもしれないが、朝鮮半島の不安定の方がより深刻な懸念である。

ピョンヤンへの圧力強化は、中国への依存を強めるだけである。金正日氏の頻繁な中国訪問と彼が受ける待遇の質はこの傾向を明確に示している。

米国の圧力はまた、20代半ばでまだあまり知られていない金正恩氏の心に対米不信と敵意を植えつけるかもしれない。

「天安」沈没についての解釈を巡る論争は、方針を転換し朝鮮半島の非核化など死活的な問題について北朝鮮との効果的な取引を軌道に乗せる努力の真ん中に置かれたままになっている。

「天安」の惨事に関する南朝鮮の調査の詳細は公表されておらず、ソウルではこの調査結果に対する反対の底意は強まっている。

私たちは、カーター氏がピョンヤン滞在中に「天安」問題について議論したかどうかは、まだわからない。私たちは、カーター元大統領が1994年に北朝鮮の最初の指導者である金日成氏と友好的かつ有意義な会談を行ったことで、北朝鮮で尊敬されていることは知っている。したがって、彼は北朝鮮の指導部から何が起こったのかについて説明を受けたかもしれない。

数年にわたるみずからの北朝鮮当局とのやりとりを通して、私は彼らが自分たちの政府の

立場を実直かつ明瞭に発言することを知っている。

したがって、私は、自主的に論争の渦中に入っていく意志を持つことで知られているカーター氏が、ゴメス氏以上のものをもって帰ってきたに違いないと信じている。カーター氏が、金正日氏以外の北朝鮮指導層との会談を通じて得ている洞察は、制裁と敵意を特色とする現在の対北政策には肯定的な効果はほとんどなく、ピョンヤンとの何らかの形の対話へと戻ることが検討されるべきであるという、オバマ政権内で生まれつつある認識と一致するはずである。

元駐ソウル米大使であり現在北朝鮮問題特別大使を務めるスティーブン・ボスワースは長い間ピョンヤンとのさらなる対話を支持してきた。ワシントンにはまた、中国の反発によって、ピョンヤンに対する圧力は異常に高くついているという認識が強まっている。

したがって、今回カーター氏を送る選択をしたことで、ホワイトハウスが北朝鮮にたいする敵対姿勢を効果的な政策に変えようとしていると信じていいかもしれない。 (“Testing North Korean Waters,” By DONALD P. GREGG, New York Times, August 31, 2010)

日朝正常化こそ日本の生き残る道だ —「特集」北朝鮮の真実—

菅沼光弘 元公安調査庁第二部長

「月刊日本」10号

党代表者会議の意味するもの

— 朝鮮労働党代表者会議が44年ぶりに開かれる。日本の各種報道は「三代目への継承が行われるのではないかと観測している。

菅沼：まったく本質が見えていない報道だ。日本人は北朝鮮情勢を、三代目は誰になる、という程度の、ワイドショー的認識でしか理解していない。だが、今回の党代表者会議は、「最高指導機関選出のため」開催されるとなっているが、朝鮮半島だけではなく、北東アジア全体の政治経済構造を大きく転換させる歴史的意義を持つ会議となる可能性がある。

満州こそ日本の生命線

— 今回、金正日政権下での代表者会議は始めてとなる。ここではどのような政治方針が定められるのか。

菅沼：まず現下の北東アジア情勢を確認しよう。何度も言うが、北朝鮮の政治はそれを取り巻く国際政治・軍事・経済・地政学的条件によって方向づけられるからだ。

3月26日、韓国の哨戒艦「天安」が謎の沈没を遂げたが、この真実は永久に闇の中だろう。だが結果として在日米軍基地県外移設問題など吹っ飛んでしまったし、日米韓の軍事強調も強まった。一方、真犯人と名指しされ非難された北朝鮮は六カ国協議の再開を呼びかけているが、アメリカとの融和には向かわず、中国との関係を深めることになった。

それでは中朝関係はどうなっているのか、「天安」沈没事件の後、金正日は5月と8月に中国を訪問した。一年に二度も金正日が訪中するという異例の事態を「北朝鮮の経済状態が悪化しているので、中国に援助を乞いに行った」などと報じる日本のメディアもあるが、これはまったく金正日訪中の本質を理解できていない。金正日はどこを訪問したか。中国東北三省だ。

金正日が八月に訪中した都市を考えてみよう。吉林、長春、延吉、中国はこの三市を結ぶベルト地帯を全部開発区にし、この地域の発展が北東アジア経済圏の発展の機動力になるこ

とを期待している。これで、胡錦濤が金正日との会談のために、北京から 1000 キロも離れた長春にまでわざわざ出てきた理由がわかるだろう。すなわち、一方的に北朝鮮が中国に屈従外交を行ったのではなく、中朝両者にとって、経済協力体制が相互互惠関係にあることを示している。

北朝鮮は、2012 年に「強盛大国の大門を開く」宣言している。強盛大国とは、北朝鮮に言わせれば、思想大国・軍事大国・経済大国のことだ。思想大国については、主体思想体系がすでに完成している。そして核ミサイル開発によって、軍事大国も実現した。残るは、経済大国だけだ。実際、北朝鮮は新年の三紙共同社説によって農業・軽工業の育成に全力を挙げよう全党、全国民に呼びかけている。

今回の党代表者会議は、先軍政治から経済優先への転換を決定づけるものになるだろう。

日朝国交正常化のチャンスを失うな

― 北東アジア経済圏をめぐって、ロシア、欧米、中国、韓国、北朝鮮、モンゴルが激しく駆け引きを行っている。その中で日本は取り残されている。

菅沼：もはや日本は北東アジアの孤児だ。かつて、朝鮮半島と満州は大日本帝国の版図であり、インフラから社会機構まで、大日本帝国の遺産が残っていた。だが戦後も 65 年も経った。その遺産も逡巡して、日本と大陸との絆もなくなりつつある。

本来、北朝鮮は中国でもロシアでも欧米でもなく、日本と共に豆満江開発を行いたかったのだ。これは大日本帝国との精神的紐帯だけではなく、地政学的条件によって日本と連携するのが一番良いと確信しているからだ。

北朝鮮には自国を防衛する意志も能力もあるが、日本から領土を奪うだけの能力はない。日本にも、再び朝鮮半島を植民地にしようという意志も能力もない。日本とは日朝国交正常化し、経済協力体制を築くことが両国にとって最善の道だった。ところが、その道を閉ざしたのは日本だった。

拉致問題がその障害となっているのだ。日本は経済制裁を続けると言っている。だが、軍事力の裏づけのない制裁など、何の意味もない。北朝鮮からしてみれば戦争もできない国の「制裁」など、寝言に等しい。寝言は寝て言えということだろう。

戦争ができないのならば、話し合うしかないのだ。日朝平壤宣言からすでに八年が経過している。日本が北東アジアで生き残るためには、何としても北東アジア経済圏の発展に参画する必要がある。そのためには、日朝平壤宣言に立ち戻るしかないのだ。交渉の扉を開き、北朝鮮に積極的に経済協力し、その交渉の中でしか拉致問題も解決されることはない。

正義正論だけでは国際政治は 1 ミリも動かない。「北朝鮮はけしからん」などという単細胞では駄目なのだ。国家は蛇のように狡猾でなければならない。

このまま日朝関係が停滞し、北朝鮮が中国・ロシアとの経済協力を強化することになれば、日本は完全に大陸の利権を失うことになる。

おそらく、今後 2 年ほどが最後のチャンスだ。北朝鮮との交渉の扉を開くこと、それこそが日本経済の未来の扉を開くことにもなるのだ。

米国は北朝鮮への関与の可能性を検討している

マーク・ランドラー 記者

ニューヨーク・タイムズ 2010 年 8 月 27 日

【ワシントン発】米国の元大統領が救援任務をもって北朝鮮を訪問した前回、すなわち 1

年前のビル・クリントンは、この訪問をオバマ政権に手を差し出す機会ととらえた同国の指導者金正日氏から敬意を受けた。今週、ジミー・カーター元大統領が拘留されている米国人を解放するために訪朝している間、金氏は中国に行くことを選択した。

金氏の冷遇の動機が何であろうと、アナリストたちは、それが朝米間の冷たい関係の深さを浮き彫りにしたと述べた。国務省は、カーター氏がアイジャロン・マーリ・ゴメスの解放を実現したという金曜日のニュースを歓迎し「重い罰金や重労働を伴う長期懲役刑」に処されるリスクがあるとして他の米国人が訪朝しないよう警告を発した。

しかし、米国は強硬な姿勢を保ちながら金正日政権への関与の新たな努力に重きを置き始めたと言吏たちやアナリストたちは述べている。

ある高官は、そのような前兆は「チェス盤での数回の動き」のように現れるであろうし、追加圧力戦術の後になるであろうと述べた。しかし、これは現政権が圧力だけでは、健康不良で孤立している北朝鮮の独裁者を動かすには十分ではないという結論に至ったことを示唆している。

先週行われた北朝鮮に関するハイレベルの会合で、ヒラリー・クリントン国務長官は、外部の専門家と元高官たちに対北朝鮮政策の次のステップについての意見を求めた。複数の参加者によると、コンセンサスは、タカ派の人々の間でも、米国は金正日氏との接触を再開する必要があるということであったという。

参加者たちによると、クリントン氏は、これまで以上に厳しい経済制裁や米国と南朝鮮による合同海上軍事演習に基づく現在の対朝鮮政策に苛立ちを示したという。これらは3月の南朝鮮海軍艦沈没事件への対応措置であり、この事件をもって南朝鮮は北を非難した。

新たな提案への賛同者たちの中にはスティーブン・ボスワース対朝鮮政策特別代表がいる。彼は対話の見通しを探るため、昨年12月に北朝鮮の首都ピョンヤンを訪問した。しかし、米政権はその後の会談予定を決めることができなかった。その後、南朝鮮の軍艦が魚雷攻撃を受けた。

ジョエル・S・ウィット元国務省対朝鮮交渉担当官は「問題は、われわれが直ちに何をするのかである」と述べた。彼は「38 North」という北朝鮮の政治を追っているウェブサイトを開設しているが、「答えは再関与である。ツール・ボックスにそれ以外のツールはない」と述べた。

米政府の官吏たちは、米国は圧力戦術を放棄するどころか強化するのが適当であると述べた。7月に米国は、外貨の収入源を一掃することを目的とした新たな措置を発表した。クリントン氏は制裁への支持を得るためロバート・J・アインホーン特別顧問をアジア諸国に送った。米軍部は北朝鮮からの威嚇と中国からの怒りを無視して黄海で南朝鮮と数日間合同演習を行った。

ジェフリー・A・ベーダー国家安全保障会議アジア上級部長は「われわれはかつての道を歩んだり、過去の経験を繰り返すことを望まない」としながら、「われわれは北朝鮮の行動の変化を待っている」と述べた。

しかし、タカ派アナリストたちの間でさえも、対話が皆無であるならば戦争のリスクが高まるという懸念が増大している。一部の批評家たちは制裁が北に核プログラムや、南朝鮮に対する好戦的態度をやめさせたという証拠はほとんどないと述べた。

金氏の悪化している健康状態とそれによる後継争いは、米政権に対して関与政策を取るべきとの圧力を増大させたと、一部のアナリストたちは見ている。一部の政府官吏たちが米国は北朝鮮の政権交代が終わるまで待てると主張する一方、他の官吏たちは北との高まる対立関係によって未来の接触の機会が失われることを恐れている。

ブッシュ政権で北朝鮮を担当していたビクター・チャは「もし、彼らに戦争の準備ができているようであるなら、新しい指導部と話し合う機会はない」と指摘した。

アナリストたちは、米政権は中国が北に圧力をかける意思があるかどうかについて自信を失っていると述べた。クリントン氏は5月に北京を訪問中、北が南の船を沈没させたという南朝鮮政府の見解を受け入れるよう中国高官たちを説得するためかなりの労力を費やした。彼女の努力は無駄であった。北京は北の責任を受け入れず、北の攻撃を非難する国連の声明を導こうとするソウルの勢いを鈍らせた。

アナリストたちは、金氏がカーター氏と会談せずに中国訪問を選択したことは、北朝鮮の北京への経済・政治的依存を浮き彫りにする象徴的な出来事であったと述べた。中国は長い間、米国に対し北と対話を再開するよう働きかけてきた。そして対話の再開は北京とワシントン間の緊張緩和に役立つ。米政権にとってのひとつの問題は対話の形と内容である。6者会談という枠にこだわるアナリストはほとんどいない。6者会談では、北朝鮮の核プログラムについて同国と米国、南朝鮮、中国、日本、ロシアが交渉を行ってきた。しかしこの対話の枠組みには、たぶん南朝鮮、日本などの同盟国諸国からの支持が必要である。

もうひとつの問題は、米政権がみずからの要求に妥協がなかったことである。政府の官吏たちは、北朝鮮が自国の核兵器廃棄に同意するまで米国は交渉しないと繰り返し述べた。彼らが恐れているのは、ブッシュ、クリントン両政権の時のように、北が譲歩を引き出したうえ、新たな核実験を行うとことである。

専門家たちは、核プログラム以外の議題について北朝鮮に関与することが一つの選択肢になりうると述べた。しかし他の専門家たちは、核問題は不可避であると述べた。今のところ、米政権はよりプラグマティックな戦略を示している。フィリップ・J・クローリー国務省スポークスマンは「米国人は旅行に関する警告に留意し、北朝鮮は避けるべきである」、「われわれにはわずかな元大統領しかいない」と述べた。（“U.S. Considers Possibility of Engaging North Korea,” By MARK LANDLER, New York Times, August 27, 2010）

★ トピックス

◆ アントニオ猪木さんが訪朝、「親善勲章」受賞

朝鮮中央通信は9月15日、日本イノキ・ゲノム・フェデレーション（IGF）株式会社のアントニオ猪木（本名・猪木寛至氏）会長に、同国の親善勲章第1級が授与されたと報じた。

猪木会長一行は17日から平壤で開幕する「第12回平壤国際映画祭祝典」に参加するため、12日から訪朝した。朝鮮中央通信は勲章授与について「朝日両国人民間の親善のため、多くのことを行った」と伝えた。授与式は平壤の万寿台議事堂で行われ、朝鮮の楊亨燮（ヤン・ヒョンソプ）最高人民会議常任副委員長、朴根光（パク・グンクァン）朝日友好親善協会会長のほか、イノキ・ゲノム・フェデレーション会社一行が参席した。日本の映画が朝鮮の映画祭に招待を受けるのは、2000年に山田洋次監督『男はつらいよ』など6作品が上映されて以来10年ぶりとなる。猪木氏は招待を受けた映画『ACACIA-アカシア-』で主演を務めた。

◆ 日朝ピョンヤン宣言8周年

「在日朝鮮人の権利確立と新しい日朝関係を求める集会」

9月17日、日朝国交正常化連絡会が主催し日朝ピョンヤン宣言8周年「在日朝鮮人の権利確立と新しい日朝関係を求める集会」が東京の全水道会館で約150人参加のもと行われた。

集会では徐勝（ソ・スン）立命館大学コリア研究センター運営委員が「在日朝鮮人の権利確立-韓国併合100年の歴史のなかで」というテーマで、和田春樹東京大学名誉教授が「日

朝交渉打開への可能性を探る」というテーマで記念講演を行った。

また集会では、在日本朝鮮人人権協会の金昌宣副会長と神奈川高教組の宗田千絵さんが、在日朝鮮人に対する差別の状況について報告を行った。

集会では日本政府に対して、①韓国併合 100 年のうちに日朝国交正常化交渉を無条件で再開し、②朝鮮の水害被害に対し早急に人道的支援を行い、③在日朝鮮人の権利を認め、高校無償化措置を朝鮮高校にも即時適用することを求める集会アピールが採択された。

◆ 東京で「高校無償化からの朝鮮学校除外に反対する全国集会」、1,700 人が集う

朝鮮高校への無償化適用が先送りされている中 9 月 26 日、約 250 の市民団体の主催で「高校無償化からの朝鮮学校除外に反対する全国集会」が社会文化会館で行われ、広範な日本市民と朝鮮高校生、父兄等、約 1,700 人が参加した。

集会では国会議員、地方議員による報告のあと、9 人の朝高生によるリレートークと 4 人の日本の高校生による連帯の挨拶があった。

とくに朝鮮高校生徒たちの心の叫びは、参加者たちに大きな感銘を与えた。神戸朝鮮高級学校の代表は、「学校に脅迫状とカッターナイフが送られてくるなど、とても恐ろしい思いをしました。でも私たちはウリハッキョ（私たちの学校）が好きです。ウリハッキョはアボジ（お父さん）、オモニ（お母さん）が学んできた場所であり、私たちの次の世代の人たちも学ぶ場所だからです」と語った。

集会では菅直人総理大臣と高木義明文部科学大臣に送る要請文が満場一致で採択された。

集会後、参加者たちは永田町から文科省、新橋、銀座などの約 6km をデモ行進しながら、朝鮮高校の生徒にも無償化を一日も早く適用することを町行く人々に訴えた。

★ ドキュメント

◇ 朝鮮民主主義人民共和国政府の談話・声明

●朝鮮人民軍前線西部地区司令部通告（8 月 3 日）：「南の朝鮮西海上射撃騒動に物理的対応攻撃」

8 月に入ってから白翎島、大青島、延坪島付近の水域で地上・海上・水中攻撃手段を動員して行おうとしている南朝鮮軍部好戦狂の海上射撃騒動は、単なる訓練ではなく、神聖なわが共和国の領海に対する露骨な軍事侵攻行為であり、不法・無法の「北方限界線」(NLL)をあくまでも守り抜こうとする無謀な政治的挑発である。

チョンアン事件を契機に始まった南朝鮮の反共和国捏造謀略騒動が近年、李明博逆賊一味が展開している許し難い最も重大な挑発行為であるとすれば、今回の海上射撃騒動はわれわれの自衛権を標的にした直接的な軍事侵攻行為である。

当司令部は、生じた情勢に対処して逆賊一味の無謀な海上射撃騒動を強力な物理的対応攻撃で鎮圧するという断固たる決心を採択した。既に、内外に厳かに宣布したように、朝鮮西海には専らわれわれが設定した海上境界線があるだけである。

われわれの自衛的な対応攻撃が予見されることに関連して、朝鮮西海の 5 島付近の水域で漁船を含むすべての民間船舶が逆賊一味の設定した海上射撃区域に入ってはならないことを事前に知らせる。火には火をもってして制するのは、わが軍隊と人民が選択した不変の意志であり、確固たる決心である。

●朝鮮中央通信社論評（8 月 10 日）：「海外侵略のための本格的な歩み」

日本が、海外侵略作戦遂行のための本格的な歩みを踏み出した。去る7月に朝鮮東海で強行された最大規模の米国・南朝鮮連合海上訓練に、「自衛隊」の将校が「参観」の名目で参加した。

日本は演習に直接参加せず、ただ海上「自衛隊」の将校が米海軍のジョージ・ワシントンに搭乗して訓練状況を見守ったというふうにくどくどと弁明している。

これは、憲法によって禁じられている「集団的自衛権」行使の抵触によって起こることになる国際的な物議を和らげるための日本特有の抜け目がない打算によるものである。

周知のように、米原子力空母と潜水艦で構成された水上・水中核攻撃手段と数百機の戦闘機をはじめ膨大な海空軍武力が投入された今回の連合海上訓練は、「防御」と「抑制」の看板の下に冒険的な北侵戦争マニュアルを練磨した無謀な火遊びである。

日本の海上「自衛隊」の将校が、単に「参観」のために原子力空母に搭乗したという「火事場見物」の名分はあまりにも愚かである。

世論は、日本の海上「自衛隊」の「参観団」が訓練に参加したのは今後「自衛隊」の役割に関連して注目される点であると懸念を表している。

「東京新聞」は、「オブザーバー」とはいえ、特定国を想定した軍事演習に「自衛隊」が参加するのは極めて異例であると指摘した。

看過できないのは、時を同じくして日本の内閣官房長官の口から再び独島(日本名・竹島)強奪妄言が出たことである。

これに関連して南朝鮮の民主労働党のスポークスマンは、「自衛隊」の連合訓練参加について独島強奪を狙う日本が東海上へ進出する道を開くためのものであると糾弾した。

事実は、重大な段階に達した日本の再侵略野望をありのまま示している。

日本の反動層は、米国の侵略的な対朝鮮戦略に便乗することで、海外膨張野望の実現の突破口を開こうとたくらんでいる。

朝鮮東海での米国・南朝鮮連合海上訓練に海上「自衛隊」の将校を「オブザーバー」と「参観」の冠をかぶせて参加させたが、今後、今回のことを前例にして「自衛隊」武力を大っぴらに米国・南朝鮮合同軍事演習に投入しようとしている。

日本が南朝鮮での艦船沈没事件をきっかけに強行された米国主導の狂気じみた軍事演習策動に参加したのは明白に、朝鮮再侵略の悪巧みによるものである。

日本が歴史の教訓を忘れ、われわれに対する再侵略の妄想を実現しようとするなら、その破滅的結果は何によっても補償できないものになるであろう。

●朝鮮人民軍総参謀部のスポークスマン談話(8月15日):「米帝と李明博逆賊一味に無慈悲な鉄つい下す」

既に核攻撃手段を含む米帝侵略軍の膨大な武力が南朝鮮とその周辺水域に機動、展開した状態にあり、中部太平洋近海と米本土には有事に朝鮮戦線に投入する陸・海・空軍の作戦集団が出動態勢を整えている。南朝鮮地域では、南朝鮮の現役および予備役武力は言うまでもなく、地方の南朝鮮行政機関と民間企業まで今回の演習に総動員される。

チョンアン(天安)沈没事件が類例のない捏造騒動、謀略騒動で一貫した無分別な反共和国軍事挑発の第1段階であるとすれば、「ウルチフリーダム・ガーディアン」連合訓練をはじめとする戦争演習騒動は本格的な軍事的侵攻を狙った実際の行動段階である。それは、「防御」のベールをまとって行う今回の戦争演習騒動がわれわれを標的にして行われる好戦的で露骨な北侵戦争演習であるからである。

現事態は、今回の演習騒動が動員される手段と力量の規模、その内容と性格において否定できない反共和国全面戦争演習であり、史上最大規模の核戦争演習であることを実証している。

現実には、かくも騒々しく唱えてきたオバマ政府の「核なき世界」建設構想や朝鮮半島の非核化が単なる偽善にすぎず、それに追従して血道を上げる李明博事大売国奴らの反民族的で反統一的な特大型犯罪をありのまま示している。

好戦狂が繰り広げる無謀な戦争挑発騒動に驚くわが軍隊と人民ではない。わが共和国を狙った無謀な戦争演習騒動が極限ラインに至ったこの時刻、わが軍隊と人民は既に決心し、内外に宣布した通り、米帝と李明博逆賊一味に無慈悲な対応の鉄槌を下すであろう。われわれが断行する軍事的対応は、世界で誰も受けたことのない最も厳しい懲罰である。

米国のオバマ政府は、反共和国孤立・圧殺策動でのぼせた頭を冷やし、国と民族の尊厳を守るために宣明したわれわれの断固たる決心と厳粛な宣言が何を意味するのかを深くかみしめるべきである。

事大と屈従が体質化した李明博逆賊一味は近い将来、事大売国奴の運命がどうなるのかをはっきり知ることになるであろう。誤って選択した政策的決断で無益な戦争騒動に執着すればするほど、好戦狂は自滅の墓にもっと早く、もっと深くはまるようになるであろう。

●朝鮮中央通信社論評（8月16日）：「無謀な軍事的行動には代価が伴うであろう」

米国が無分別な軍事的冒険で厳しい局面に置かれている朝鮮半島の情勢を爆発ラインへと追い込んでいる。わが共和国と国際社会の強い抗議と糾弾にもかかわらず、米国は南朝鮮と共に「ウルチフリーダム・ガーディアン」合同軍事演習の強行に進入した。

今回の合同軍事演習には、米国の原子力空母ジョージ・ワシントンと共に南朝鮮および海外駐屯米軍3万余人と多くの南朝鮮軍兵力が動員されるという。

「ウルチフリーダム・ガーディアン」合同軍事演習は、朝鮮半島であくまでも全面戦争の火ぶたを切ろうとする米国と南朝鮮の冒険的な核戦争演習のエスカレートである。

この戦争演習の侵略的で攻撃的な性格は、最近、米国と南朝鮮の軍部好戦狂が一連の合同軍事演習を通じて米軍と南朝鮮軍の連合防衛能力を強化し、われわれに「敵対行為」を中止すべきであるという明白なシグナルを送ることになると公然と騒ぎ立てたことからあらわになっている。

艦船沈没事件の真相を捏造してそれを口実に、あえて誰かを対象に攻撃訓練を行って「抑止のシグナル」を送るというのは言語道断である。

主人と手先がグルになってわれわれに対する「制裁」や「強い圧迫」を公然と標榜し、それを実際の行動に移そうとする今回の核戦争演習は徹頭徹尾、わが共和国を標的に定めた侵略的な戦争行為である。

米国と南朝鮮の軍事的挑発は、決して誰それの「脅威」を防ぐための防衛的な性格の武力示威や定例の軍事訓練ではない。

これは、チョンアン事件の「北関連説」を否定し、朝鮮半島の緊張緩和を願う国際社会の要求と意思に対する露骨な挑戦であって、わが共和国に不意の核先制攻撃を加えようとする米国と南朝鮮好戦狂の無謀な企図がさらに現実化していることを証明するものである。

わが軍隊と人民は、米国がわが共和国に対する軍事的圧迫を強化して朝鮮半島に核戦争の暗雲を引き寄せているこんにちの情勢の下で、自衛的核抑止力を保有したことがどれほど正当な選択であったのかをあらためて痛感している。

米国と南朝鮮は、チョンアン事件を口実に朝鮮半島の情勢を最悪の局面へと追い込んでいる無謀な軍事的挑発が招くおびただしい代価について骨身に染みるほど痛感することになるであろう。

米国と李明博逆賊一味は、高度の撃動状態（引き金に指を掛けた状態）にあるわが軍隊の鉄の意志と断固たる立場が決して空言ではないことをしっかりと認識すべきである。

●朝鮮外務省のスポークスマン、朝鮮中央通信記者の質問に回答（8月18日）：「合同演習は停戦協定違反、議長声明にも反する」

米国と南朝鮮当局が、16日から前例のない好戦的目的を帯びた史上最大規模の「ウルチフリーダム・ガーディアン」合同軍事演習を開始した。1カ月足らずの間に東海と西海できな臭い戦争演習を相次いで行ったのに続いて、またしても南朝鮮全域で総合的な合同軍事演習を強行しているのは、朝鮮半島であくまで核戦争の導火線に火を付けようとする危険極まりない軍事的挑発である。

これらの戦争演習騒動は、停戦協定に対する乱暴な違反であり、朝鮮半島の懸案を対話と協議を通じて平和的に解決すべきであるとする2010年7月9日付国連安全保障理事会議長声明にも全的に反する行為である。朝鮮半島と地域の緊張の高まりに対する国際社会の憂慮を完全に無視したまま引き続き強行されている軍事的挑発行為は、米国こそ世界の平和と安全を脅かし、破壊する張本人であるということを明白に実証している。

戦争狂信者は無分別にも墓穴を掘っている。われわれは、対話にも、戦争にも、すべて準備できており、自分のものを守るためのあらゆる手段と方法を皆備えている。

こんにちの情勢はわれわれに先軍政治の正当性と生命力をより一層痛感させている。米国と南朝鮮当局は、緊張激化にも臨界点があることを知るべきであり、情勢爆発の責任から逃れる考えをすべきでない。

●朝鮮外務省スポークスマン談話（8月20日）：「日本は早急に謝罪、賠償すべきだ」

100 年前、日本は武力を動員して強盗さながらの方法で「韓日合併条約」を捏造し、朝鮮を不法に併呑した。植民地統治の間、日帝が朝鮮人民に及ぼした人的・物的・精神的被害は計り知れない。幾つかの数字を挙げただけでも、100 余万人の人々が虐殺され、840 万余人の青壮年が強制連行されて奴隷労働と侵略戦争に駆り出されたし、20 万人の女性が残酷な性奴隷生活を強いられた。人類史に植民地時代があったが、日本のように植民地民族の言葉と文字、人の姓と名前まで奪い、家々の茶わんやさじまで強奪していく極悪な民族抹殺と略奪政策を実施した国はなかった。

敗北後も、日本は米国の手先として終始一貫、朝鮮の統一を妨害して、われわれの制度を圧殺するための悪辣な敵視政策を実施してきた。

この 100 年間は日本にとって罪惡の歴史であり、その清算を拒否してきた歴史である。その 100 年間は、朝鮮人民にとって日本による被害の歴史であり、日本に対する憤怒の歴史である。

地球上の国と民族が半世紀が過ぎても毎年、第 2 次世界大戦の惨禍を顧みてその記憶を新たにし次代に譲り渡すのは、ほかでもない軍国主義とファシズムの再生を阻むためである。しかし、日本だけは歴代当局者や現職政治家自体が毎年、敗北日に「靖国神社」にはばかりことなく参拝するのが現実である。

「韓日合併条約」捏造 100 年に際して、日本の現首相は南朝鮮に対してのみ過去を反省し、わびるとの談話を発表した。日本の現政権が過去の軍国主義政権と本当に縁がなくその復活を夢見ないなら、軍国主義政権のすべての被害者に条件や差別なく過去を反省し、謝罪してこそ当然であろう。世界が日本の軍国主義再生の危険性について始終、憂慮を解消できずにいる理由がまさにここにある。

日本は、罪惡に満ちた過去について朝鮮民主主義人民共和国に謝罪し、賠償する義務から絶対に逃れられない。日本は条約ならぬ「条約」を捏造してわれわれの国権を強奪し、朝鮮人民に働いた特大型犯罪について早急に謝罪し、賠償すべきである。そうしない限り、絶対に国際社会で堂々と生きることができない。

日本は、敗北後に行ったすべての反共和国・反朝鮮総聯策動について誠実に反省し、対朝鮮敵視政策を直ちに撤回すべきである。そうすることが朝鮮の文化的影響を受けて生きてきた日本が守らなければならない最小限の道理であり、自分らの罪過を贖罪する道になるであろう。

日本は、歴史歪曲と独島（日本名・竹島）強奪企図のような軍国主義復活策動を直ちに中止すべきである。そうしてこそ、地域の恒久平和と安定を図り、日本自体の安全にも有利であろう。日本から積もり積もった恨みの代価を必ず受け取るというわが軍隊と人民の意志は確固不動である。

●朝鮮中央通信（8月21日）：「鴨緑江はんらん、新義州市一帯が被害」

朝鮮の平安北道新義州市とその一帯が洪水の被害に見舞われた。

（8月）21 日午前零時から 9 時までの間に、水豊湖周辺地域に降った 300 ミリ以上の豪雨と中国地域での豪雨によって鴨緑江がはんらんし、新義州市上端里と下端里、多智里、義州郡西湖里と於赤里などの住宅と公共の建物、耕地が百パーセント浸水した。現在、同地域では、新義州市をはじめ平安北道の活動家と勤労者、朝鮮人民軍軍人が動員されて救助活動が行われている。

●朝鮮中央通信（8月26日）：「新義州市と義州郡の物質的被害状況」

朝鮮の平安北道新義州市と義州郡で、集中豪雨と洪水によって莫大な物質的被害が出た。19、20 の両日、中国東北地方を襲った例年にない豪雨と、（8月）21 日から水豊湖周辺地域に降った集中豪雨によって川がはんらんし、新義州市と義州郡に大きな被害を与えた。

当該機関の集計資料によると、7,100 余棟、7,750 余所帯の住宅が全半壊したり浸水した。また、7,200 余ヘクタールの耕地が冠水し、土砂に埋もれ、流失し、300 余棟の生産建物と公共建物、400 余メートルの橋、7,700 余立方メートルの鉄道路盤と構造物、そして運輸機材、揚水機、モーターが破壊された。

これとともに、電力部門でも多くの設備が浸水、流失するなど少くない損失を被った。

朝鮮政府は、すべての力量を動員して被害復旧作業を力強く行う一方、被災地の人民の生活を安定させるための活動を積極的に行っている。

●朝鮮中央通信報道（8月27日）：「カーター元米大統領の訪朝に関する報道」

ジミー・カーター元米大統領と一行が 8 月 25 日から 27 日まで朝鮮を訪問した。朝鮮最高人民会議常任

委員会の金永南委員長がカーター氏と一行と会見し、懇談した。会見では、朝米間の相互の関心事となる懸案問題が論議された。

最高人民会議常任委員会委員長は、朝鮮半島の非核化と6者会談の再開に関するわが共和国政府の意志を表明した。特に、朝鮮半島の非核化は金日成主席の遺訓であるということに言及した。

カーター氏は、米国政府と元大統領の名義で、米国人ゴメス氏が朝鮮に不法入国したことについて謝罪して再発防止を保証し、金正日総書記が特赦権を行使して彼を寛大に許して帰国させてくれるよう丁重に要請する書簡を最高人民会議常任委員会委員長を通じて送った。

金正日総書記は、米国政府とカーター氏の要請についての報告を受け、朝鮮民主主義人民共和国社会主義憲法第 103 条に準じて、不法入国した米国人ゴメス氏に特赦を実施して釈放することに関する朝鮮民主主義人民共和国国防委員会委員長の命令を下した。カーター氏は、これに深い謝意を表した。

これに先立ち、米 국무省領事担当副次官補一行がゴメス氏の問題に関連して9日から11日まで平壤を訪れ、朝鮮の外務省と当該法機関の関係者と会った。

朝鮮側は、米 국무省副次官補一行が3度ゴメス氏と面会して健康状態を確認できるように特例的な措置を講じ、米国側はこのような人道的措置に謝意を表していた。不法入国した米国人に対する釈放の措置は、わが共和国の人道主義と平和愛好的な政策の表れである。

訪問期間、カーター氏と一行は、外相と外務省の米国担当次官と会い、朝米双務関係の問題と6者会談再開の問題、朝鮮半島非核化実現の問題など、相互の関心事について虚心坦懐に論議を行った。また、カーター氏と一行は国立交響楽団の公演を鑑賞した。

ジミー・カーター元米大統領のわが国訪問は、朝鮮と米国との間の理解を深め、信頼を醸成する上で有益な契機となった。

●朝鮮中央通信（8月30日）：「金正日総書記、中国を非公式訪問」

朝鮮民主主義人民共和国国防委員会委員長である金正日朝鮮労働党総書記は、中華人民共和国国家主席である胡錦濤中国共産党中央委員会総書記の招請により、26日から30日まで中華人民共和国を非公式訪問した。

朝鮮国防委員会副委員長の金永春人民武力部長、朝鮮労働党中央委員会の金己男書記、太宗秀部長、姜錫柱第1外務次官、朝鮮労働党中央委員会の張成沢、洪石亨、金永日、金養建の各部長、朝鮮労働党黄海北道委員会の崔竜海責任書記、朝鮮労働党平安北道委員会の金平海責任書記、朝鮮労働党慈江道委員会の朴道春責任書記が随行した。

中国の党および国家の指導者と人民は、再び中国を訪問した金正日総書記を熱烈に歓迎し、最大の誠意を尽くして手厚く歓待した。

金正日総書記は、胡錦濤総書記と27日、長春市で温かく対面し、会談を行った。会談には、中国側から中国共産党中央委員会書記局書記である令計画党中央委員会弁公庁主任、戴秉国国务委員、王家瑞中国共産党中央委員会対外連絡部長、楊潔篪外相、張・国家発展改革委員会主任、陳徳銘商務相、劉結一中国共産党中央委員会対外連絡部副部長、劉洪才駐朝中国大使が参加した。

胡錦濤総書記は、中国の党と政府、人民を代表して金正日総書記の中国訪問を熱烈に歓迎し、外来侵略者に反対する共同闘争の中で中朝友好の歴史的根源がもたらされた吉林省と黒竜江省に対する訪問は、両国の伝統的な友好・協力関係をより高い段階へ発展させる上で特別に重要な意義を持つと指摘した。

また、金正日総書記が5月に中国を訪問したのに続き、4カ月ぶりに再び訪問したのは、両国の老世代の指導者が築き上げた伝統的な朝中友好をどれほど重視しているのかに対する明確な実証になると述べ、朝中友好の絶え間ない強化・発展のために傾けている総書記の貢献を高く評価した。

金正日総書記は、4カ月ぶりに胡錦濤総書記と再び対面することになったことをうれしく思うと述べ、貴重な時間をさいて遠く長春にまで来て親切に出迎え、歓待してくれたことに深い謝意を表した。

朝中両党、両国の最高指導者たちは、同志的で真摯かつ友好的な雰囲気の中で自国の状況をおのの通報し、朝中両党、両国の関係をより一層発展させることと、共通の関心事となる重大な国際および地域問題について虚心坦懐に意見を交わし、完全な見解の一致を見た。

胡錦濤総書記は、伝統的な中朝友好は両党、両国人民の高貴な富であり、中朝友好を時代とともに前進させ、代を継いで伝えていくのは双方の共同の歴史的責任であると述べ、中朝友好・協力関係を強化し、発展させるのは、中国の党と政府の確固不動の方針であると指摘した。

また、東北地域の至る所に金日成主席の革命の足跡が歴々と刻まれていると述べ、主席は長期間の闘争を通じて朝鮮の独立を成し遂げただけでなく、中国革命の勝利にも大きな寄与をしたと指摘した。

そして、中朝協力を強化するのが、両国の社会主義建設をより立派に推し進め、双方の共通の利益と同地域の平和と安定、繁栄をより立派に守り、促すのに有利であると指摘した。

胡錦濤総書記は、中国側は朝鮮側と共に中朝友好・協力関係を心から守り、発展させていくことを願うと述べ、伝統的な中朝友好に新たな生气と活力を注入し、中朝善隣友好・協力関係を奮い起こしてさらに深みのあるものに発展させることにより、両国、両人民により大きな幸福をもたらす、東北アジア、ひいては世界の平和と安定、繁栄・発展にさらなる寄与をしようと思うと強調した。

金正日総書記は、長い伝統を持つ朝中友好は歴史の風波と試練を乗り越えた友好であり、歳月が流れ、世代が交代しても変わらないと述べ、朝中友好・協力関係を一層強化し、発展させるという朝鮮の党と政府の揺るぎない意志と決心を再び宣明した。

また、東北地方は金日成主席が東北の水を飲み、空気を吸いながら中国の革命家、人民と固く手を取り合って 20 余年の苦難に満ちた革命闘争を行った忘れられない地であるとし、主席の心の中からは東北のなじみのある山野と、共に戦った中国の同志に対する思いがいつときも離れたことがなかったと述べた。

そして、今回の訪問過程に日を追って変ぼうする東北地域の発展ぶりを直接目撃して深い感銘を受けたとし、この驚くべき変革は中国の党と政府が示した東北振興戦略の正当性と生命力に対する一大誇示になると述べた。

会談では、近年数回にわたって行われた朝中最高指導者の歴史的な対面以降、両党、両国の友好・協力関係が社会主義の理念に従って一層増進、発展したと評価し、社会主義の建設と祖国統一を目指す両党、両国人民の闘いに対する相互の支持と固い連帯が表された。

胡錦濤総書記は、朝鮮が安定を守り、経済を発展させ、人民生活を改善するために取った積極的な措置を高く評価し、金正日総書記を首班とする朝鮮労働党の指導の下に朝鮮人民が国家建設偉業でさらなる成果を収めることを心から願った。

そして、朝鮮の党と人民が社会主義の発展方向を堅持し、朝鮮の同志たちが自国の実情にかなった発展の道を模索することを支持し、金正日総書記の指導の下に全党、全国が緊密に団結し、刻苦奮闘して強盛国家建設偉業の実現を目指す闘いで必ず新たな成果を収めるものと確信すると指摘した。

金正日総書記は、胡錦濤氏を総書記とする中国共産党の指導の下、中国人民が党の執権能力建設を強化し、科学的発展観を実践し、調和の取れた社会を建設する歴史的路程で、絶えず新しく偉大な勝利を収めるものと信じることを指摘した。

双方はまた、共通の関心事となる国際および地域問題、特に東北アジアの情勢に関連して虚心坦懐かつ真摯に意見を交換し、完全な見解の一致を見た。

金正日総書記の中国訪問を歓迎して、胡錦濤総書記が 27 日夕、長春市南湖賓館で盛大な宴会を催した。宴会には、金正日総書記と共に金永春、金己男、太宗秀、姜錫柱、張成沢、洪石亨、金永日、金養建、崔竜海、金平海、朴道春の各氏をはじめ随員メンバーと崔炳官中国駐在朝鮮大使が招かれた。

また、中国共産党中央委員会書記局書記である令計画党中央委員会弁公庁主任、戴秉国国務委員、王家瑞中国共産党中央委員会対外連絡部長、楊潔篪外相、張平国家発展改革委員会主任、陳徳銘商務相、劉志軍鉄道相、劉結一中国共産党中央委員会対外連絡部副部長、劉洪才駐朝中国大使、孫政才吉林省党書記、王儒林吉林省長、高廣濱長春市党書記をはじめ中央と地方の指導幹部が参加した。宴会では、胡錦濤総書記と金正日総書記が演説した。(演説は別掲)

この日、長春市南湖賓館劇場では、金正日総書記を歓迎して中国の芸能人が特別に準備した芸術公演が行われた。金正日総書記は、胡錦濤総書記と共に公演を鑑賞した。金正日総書記は、出演者の公演成果を祝って花かごを贈った。

胡錦濤総書記は、金正日総書記と温かい別れのあいさつを交わした。

金正日総書記は 5 日間にわたって、中国の吉林省と黒竜江省のいくつかの都市を訪問し、至る所で中国人民の真心のこもった熱烈な歓迎を受けた。

金正日総書記は、金日成主席の革命活動緑故地の一つである吉林市を訪問した。総書記を吉林駅で、戴秉国、王家瑞、劉志軍、劉洪才、孫政才の各氏、陳偉根吉林省副省長、周化辰吉林市党書記、張曉霽吉林市長をはじめ中央と地方の幹部が出迎えた。

金正日総書記は、戴秉国氏と会い、温かい談話を交わした。戴秉国氏は、中朝友好を高度に重視してい

る胡錦濤総書記が金正日総書記を特別に迎接するために自身を吉林に派遣したと述べ、胡錦濤総書記と中国共産党中央委員会、中華人民共和国国務院を代表して中国訪問を熱烈に歓迎した。

戴秉国氏は、金正日総書記の今回の中国訪問は、中朝友好の強化・発展に輝かしいページを記す歴史的な出来事になると指摘した。そして、金正日総書記の指導によって朝鮮人民が、強盛大国建設偉業の実現をはじめ各分野で多くの成果を収めていることについて中国人民は自分のことのように喜んでおり、心から祝うと述べた。続いて、胡錦濤総書記をはじめとする中央指導集団は、中朝友好を高度に重視していると述べ、伝統的な両国の友好・協力関係を絶えず強化し、発展させようとする中国の党と政府の確固不動の立場を再度宣明した。

金正日総書記は、戴秉国氏をはじめ中央と地方の責任幹部の案内で吉林市の各所を見て回った。金正日総書記は、金日成主席が 1927 年から 1929 年まで学んだ吉林毓文中学校を訪問した。教職員、生徒の熱烈な歓迎を受けて学校に到着した総書記は、校庭にある主席の銅像に花かごを献じて崇高な敬意を表した後、原状のまま保存されている校内を見て回った。金正日総書記は、80 余年前の学生時代の主席のにおいが残る机といすをはじめ貴重な事績物を敬虔な心情で見て万感胸に迫る様子であった。

学校を訪れた金正日総書記に、毓文中学校の生徒合唱団は不世出の偉人である金日成主席への限りない敬慕の念を抱いて「金日成將軍の歌」と吉林毓文中学校校歌を歌った。

金正日総書記は訪問を終えて同校に「朝中友好の象徴であり、長い歴史と伝統を持つ毓文中学校が立派な活動家をさらに多く育てることを願います。2010. 8. 26 金正日」の親筆を残した。

何曼麗校長は、あれほど待ちこがれていた金正日総書記の訪問は、中朝友好の窓口である毓文中学校にとって最高の栄光、誇りになるだけでなく、自分たちに対する貴重な精神的鼓舞・激励になると述べ、中朝友好を代を継いで永遠に花咲かせていく決意を表明し、総書記の安寧を謹んで祈った。

金正日総書記は、主席が初期革命活動期に度々利用した秘密の場所の一つである北山公園の薬王廟を参観した。総書記は、薬王廟で行った主席の革命活動に関する解説を受けた後、主席が秘密会議を行った地下室と寺の本堂を見て回った。そして、中国の党と政府、人民が主席の革命事績を大事にし、誠意を込めて保存、管理していることに深い謝意を表した。

金正日総書記は、いろいろな化学繊維を生産する吉林化学繊維グループと吉林市カトリック教会堂の建物を参観し、新しく変ぼうする吉林市を俯瞰した。

総書記は、吉林は以前にわたしが生活したことのある所であるとし、かつてなじみのある所に再び来て大きな変化と喜ばしい発展を遂げたのを見て深い感銘を受け、多くのことを感じたとして述べた。総書記を歓迎して戴秉国氏が盛大な宴会を催した。総書記に、吉林市は真心込めて準備した贈り物をした。

金正日総書記は、吉林省の省都である長春市を訪れた。総書記を孫政才、王儒林、高広濱、崔傑の各氏をはじめ省と市の党、政府の指導幹部が出迎えた。金正日総書記は、孫政才氏と温かい談話を交わした。孫政才氏は、金正日総書記が中国人民の親しい友人である金日成主席の革命事績が数多く刻まれている吉林省を訪問したのは省の大きな栄光、喜びであるとし、歴史的な訪問を熱烈に歓迎すると述べた。また、金正日総書記の今回の中国訪問は、両国の関係発展で歴史的な意義を持つもう一つの出来事であると述べ、中朝友好の強化・発展のために労苦と心血を注いでいる総書記に崇高な敬意を表した。そして、強盛大国の大門を開け放つための闘いで朝鮮人民が収めた成果を高く評価し、吉林省の発展状況について紹介した。

金正日総書記は、中央の同行幹部と省の指導幹部に案内されて、長春農業博覧院、長春軌道客車公司を参観し、長春市の夜景を俯瞰した。総書記は、中国共産党の指導の下に急速に発展する吉林省と長春市が収めた立派な成果を高く評価した。金正日総書記の吉林省訪問を歓迎して、吉林省党は盛大な宴会を催し、贈物をした。

金正日総書記は、黒竜江省の省都であるハルビン市を訪問した。金正日総書記をハルビン駅で、黒竜江省の吉炳軒党書記、王憲魁省長代理をはじめ省とハルビン市の党・政府の指導幹部が出迎えた。

金正日総書記は、吉炳軒氏と温かい談話を交わした。吉炳軒氏は、金正日総書記が東北の最北端に位置している黒竜江省を訪れたのは省の大慶事であるとし、省の全人民を代表して熱烈に歓迎すると述べた。

また、黒竜江省の人民は尊敬する金正日総書記の指導の下に兄弟の朝鮮人民が革命と建設で収めたすべての成果を自分のことのようにうれしく思うと述べ、社会主義強盛大国の建設でさらなる成果を収めることを願った。総書記は、黒竜江省の指導幹部と人民の心からの歓待に謝意を表した。

金正日総書記は、戴秉国氏をはじめ中央の同行幹部と省と市の指導幹部の案内で、ハルビンの食品加

工企業、ハルビン電気グループを参観した。総書記は、労働者階級をはじめ市内の勤労者たちの創造的努力によって、ハルビン市は日を追って現代的に改変されていると述べ、彼らの闘いの成果を祝った。

黒竜江省党は、中国訪問を終えて帰国する金正日総書記のために盛大な歓送宴会を催し、贈り物をした。中華人民共和国訪問を終えて帰国する金正日総書記を、戴秉国氏と黒竜江省の指導幹部が熱烈に歓送した。

金正日総書記は、数千里(朝鮮の1里は400メートル)におよぶ中国の東北地域を行き来して、勤勉で英知に富んだ中国人民の思想・感情と経済、文化など各部門を深く了解した。金正日総書記は、訪問の全期間、誠心誠意案内してくれた王家瑞、劉志軍の両氏をはじめ中国の党と政府の指導幹部に温かく見送られ、無事に祖国に到着した。金正日総書記の中華人民共和国非公式訪問は、胡錦濤総書記と中国の党と政府の特別な関心と温かい歓待の中で成功裏に行われた。金正日総書記は訪問の結果に満足の意を表し、中国の党と政府の指導幹部と東北地域人民の手厚い歓待に心からの謝意を表した。

金正日総書記が今回行った中華人民共和国に対する歴史的な訪問は、日増しに良好に発展している伝統的な朝中友好をさらに強化し、発展させる上で重大な意義を持つ画期的な出来事として、朝中友好の年代記に輝かしく記録されるであろう。

●朝鮮中央通信(9月15日):「台風7号で死者数十人」

9月の初めに発生した台風7号の影響により、朝鮮の全般的な地域が多くの被害を受けた。総合された資料によると、豪雨と強い風雨、土砂崩れなどにより、全国的に数十余人が死亡した。また、3,300余棟に8,380余世帯の住宅が破壊され、多くの人が家産を失い、臨時の避難地で生活している。

農業部門では3万550余ヘクタールの耕地が冠水し、土砂に埋もれ、流失した。230余棟の公共の建物や生産建物、そして170余カ所で道路が破壊された。

一方、鉄道は250メートルの区間で6,200平方メートルの面積の路盤が完全に破壊され、6万5,980メートルの線路が土砂崩れによる被害を受けた。

このほかにも、一部の地域で多くの区間の送電線が切断され、水源地と水道網が破壊された。その結果、被災地では電気と飲料水の供給が中断され、交通がまひして食糧や医薬品などが十分に届かなくなったので、住民の生活の安定に少なからぬ難関が生じた。

●朝鮮中央通信社論評(9月20日):「マスメディアが介入すべきことではない」

日本の「産経新聞」と「読売新聞」が、政府の高校無償化の対象から朝鮮学校を何としても除外させようとする右翼反動層の策動に合流して誤った世論を流布している。

「産経新聞」は、朝鮮学校への無償化の適用は「北の体制に組み込まれた学校に公金を投入することになる」とし、「読売新聞」は、「朝鮮学校は朝鮮総聯と強い結びつきがある。無償化の資金が万が一にも北朝鮮に不正送金されるような事態はあってはなるまい」と騒ぎ立てた。

周知のように、日本各地の朝鮮学校は民族の自覚と現代社会の要求に合う資質を備えた人材育成を目標にしてすべての在日同胞子女を受け入れてきたし、教育内容と運営においてほかの外国人学校と変わらない関係法規を徹底的に順守してきた。

現在、日本で暮らすわが同胞は、日本国民と等しく租税納付の義務を担っている。それ故、日本当局が在日同胞の民族教育に該当分の教育費を当然支払わなければならないということはあまりにも明白な理である。このため、初めに文部科学省は高校とそのほかの外国人学校と同様に朝鮮学校にも無償化制度を適用するとの前提の下に予算を立てたのである。

反共和国保守勢力の反対論によって4月からの無償化適用は見送られたが、「無償化は純然と教育制度として考える」べきであるということから、文部科学省は再び朝鮮学校を除外対象にした措置を解除する方向で最終調整に入った。

まさにこのような時に日本の保守マスメディアが威勢を張ってこれに反対しているのは、反共和国・反朝鮮総聯策動に狂った反動売文紙の無分別な行為であって、国際社会の非難を買っている。

社会の発展と文明を先導すべきマスメディアが、その使命から離脱して新しい世代への教育問題に対してまで極右保守勢力に同調しているのは恥である。

これまで「産経新聞」をはじめ日本の保守マスメディアは権力にへつらい、追従するエセマスメディアとして日本の反動層の反共和国謀略宣伝の第一線でことごとく悪質に振る舞ってきた。その根底には、対朝鮮敵

対意識と民族排外主義が体質化した反動売文紙としての卑劣な下心が潜んでいる。

朝鮮学校の生徒は、過去、日帝によって日本に強制連行された朝鮮人の子孫であり、彼らが学ぶ朝鮮学校は日本政府の承認の下に運営される合法的な民族教育機関である。過去に日帝が働いた犯罪から見ても、教育学的見地から見ても日本は当然、朝鮮学校の生徒の民族教育の権利を法的、道義的に尊重し、それを保障しなければならない。

朝鮮学校に対する無償化問題は、単にいくらかの金を支援するかしないかという金銭的な問題として見なすべきことではない。それは、主権国家の海外公民に対する日本の観点と立場の問題であり、ひいてはわが共和国への現日本当局の敵視政策の一端を反映するものである。

日本の保守マスメディアがこれを忘却して言うべき言葉、言ってはならない言葉を見分けられないようになったなら、それは既に時代を先導するマスメディアとしての資格を失ったことである。

●朝鮮中央通信（9月27日）：「金正日最高司令官が軍事称号昇格命令」

金正日最高司令官は27日、朝鮮人民軍指揮メンバーの軍事称号を昇格させることに関する命令第0051号を下達した。

金正日最高司令官は命令で、こんにち、全人民軍将兵と人民は自主時代の革命的党建設の新たな歴史を開き、朝鮮労働党を高い権威と不敗の威力を備えた革命の前衛隊伍に強化し、発展させた金日成主席に対する限りない敬慕の念を抱いて党創立65周年を意義深く記念していると指摘した。

最高司令官は、抗日革命の深く、かつ丈夫な根から生まれた朝鮮労働党は創立した日から朝鮮革命の政治的参謀部としての使命と任務を誉れ高く遂行してきたし、祖国の青史に永く輝く不滅の業績を積み上げた」と強調した。

さらに、朝鮮人民軍は領袖の軍隊、党の軍隊としてたくましく育ち、限りなく強大な白頭山革命強軍の威容を万邦にとどろかしており、銃で革命の首脳部を決死擁護して祖国防衛と社会主義強盛大国の建設で歴史に永く輝く英雄的偉勲を立てていると指摘した。

そして、党と領袖の懷の中で育った人民軍指揮メンバーが今後も党の指導に忠実に従い、白頭山で開拓されたチュチェ革命偉業を銃で最後まで完成させる上で革命の柱、主力部隊としての榮譽ある使命と本分を全うするものと固く信じつつ、栄光に満ちた朝鮮労働党創立65周年に際して人民軍指揮メンバーの軍事称号を昇格させることを命令すると指摘した。

命令には、キム・ギョンヒ、キム・ジョンウン、チェ・リョンへの各氏ら6人に大將の軍事称号を、リュ・ギョン氏に上將の軍事称号を、ロ・フンセ、リ・ドゥソンの両氏ら6人に中將の軍事称号を、チョ・ギョンジュン、チャン・ドヨン、ムン・ジョンチョルの各氏ら27人に少將の軍事称号を授与すると指摘されている。

●6.15 共同宣言実践民族共同委員会北側、南側、海外側委員会決議文（10月4日）：「全同胞の団結した力で平和と統一の新しい活路を」

こんにち、われわれは10.4宣言発表3周年を迎えている。2000年の歴史的な6月対面に続いて7年ぶりの2007年に再び北南首脳の平壤対面が実現し、「北南関係発展と平和・繁栄のための宣言」が採択されたのは、6.15統一時代の前進をより高い段階へと発展させた民族史的出来事であった。

10.4宣言発表以降、北と南は政治、経済、軍事、文化など各部門で接触と対話を実現し、宣言の履行に向けた共同の推進機構を構成して分断以降、かつてその類例のなかった民族の和解と協力、平和と統一の時代を開け放った。宣言発表以降、わずか数カ月という短期間に収められた驚くべき成果は、10.4宣言の正当性をはっきり確認させ、両北南宣言を履行していく道に平和と統一、民族共同の繁栄があるということを実践で証明した。

われわれは、歴史的な10.4宣言発表3周年に際して、平和と統一を実現しようとする全同胞の願いを盛り込んで次のように決議する。

1. われわれは、6.15共同宣言と10.4宣言を固守、履行するために努力の限りを尽くすであろう。

6.15共同宣言は祖国統一の根本原則と方向を示した統一綱領であり、10.4宣言はそれに基づいて平和と共同繁栄、統一のための実践方途を包括的に明示した行動指針である。

われわれは、6.15共同宣言と10.4宣言を固守し、実践してわが民族同士が力を合わせて自主的に統一を成し遂げていくであろう。

われわれは、北南共同宣言履行のための各界各層の往来と接触を拡大し、多面的な対話と協力事業を

積極的に展開していくであろう。

われわれは、民族の自主的尊厳と利益を徹底的に守り抜き、外部勢力の不当な干渉と専横に決然と立ち向かっていくであろう。

2. われわれは、同族間の対決を助長するすべての行為に反対し、平和を守るために先頭に立って努力していくであろう。

10.4 宣言は、北南間の敵対関係を終息させ、緊張を緩和し、平和を保障するための具体的な方途を提示した平和宣言である。

われわれは、民族的惨禍を招くどんな形態の武力増強や戦争策動に反対し、民族の和解と平和のために努力の限りを尽くしていくであろう。

われわれは、民族内部に対決と戦争を招くすべての敵対行為を排撃し、この地で戦争の危険を完全に除去し、恒久的な平和体制を構築するために積極的に努力するであろう。

3. われわれは、民族的和解と平和、統一を志向する国内外のすべての政党、団体、人士との団結をさらに強化していくであろう。

両北南共同宣言は、北・南・海外の全同胞を一つに結集させる団結の旗印であり、6.15 民族共同委員会 は民族団結実現のための統一運動の求心体である。

われわれは、両北南共同宣言を支持する国内外のすべての統一愛国勢力と固く手を取り合って宣言履行のため共に努力していくであろう。

われわれは、北・南・海外の各地域委員会をさらに拡大し、団結を強化し、階層別、部門別、地域別団体間の多様な連帯活動と共同運動を積極的に展開して、6.15 民族共同委員会の地位と役割を引き続き高めしていくであろう。

6.15 共同宣言と 10.4 宣言の旗印を高く掲げて民族的和解を図り、祖国の平和と自主統一を成し遂げようとするのは、全同胞の一致した志向であり、意志である。

すべての人は、祖国統一に対する確固たる信念と樂觀を持って両北南共同宣言の履行のための統一愛国運動にこぞって立ち上がろう！

全同胞の団結した力で平和と統一の新しい活路を切り開いていこう！

◇ 朝鮮半島日誌 (2010. 8. 8 ~ 2010. 10. 8)

- 8. 8 午前 10 時 15 分ごろ、朝鮮東海の経済水域を侵犯して漁労を行っていた南朝鮮船舶が通常の海上警備に就いていた朝鮮人民軍海軍によって拿捕。
- 8. 9 中国青年親善代表団(団長: 中国共産主義青年団の周長奎書記)が平壤に到着。
- 8.10 板門店で第 4 回朝米軍部大佐級実務接触。
- 8.11 最高人民会議常任委員会の楊亨燮副委員長、中国人民志願軍の朝鮮戦線参戦 60 周年に際して訪朝している中朝友好訪問団(団長: 中国国際友好連絡会の辛旗副会長)と平壤で会見。
- 8.11 朝鮮人民保安部代表団と中国公安代表団が平壤で会談。
- 8.11 朝鮮赤十字会委員長、南朝鮮の赤十字社総裁に、韓相烈牧師の無事帰還の人的措置求める通知文を送付。
- 8.11 朝鮮国家品質監督局と中国国家質量監督検閲検疫総局との間の 2010—12 年規格化・計量・品質監督部門の協力計画書と 2010—12 年検査・検疫部門の協力計画書、2010—12 年品質認証部門の協力計画書が北京で調印。
- 8.12 朝鮮人民軍の李英鎬総参謀長、中国公安代表団(団長: 劉京次官)と会見。
- 8.13 アムネスティ・インターナショナル、日本政府が元慰安婦被害者に早急に賠償するよう求める声明を発表。
- 8.13 朝鮮仏教徒連盟中央委員会と南朝鮮の祖国平和統一仏教協会、「韓日合併条約」(「日韓併合条約」)捏造 100 年、日帝の敗北 65 年に際し、日本の再侵略野望を断罪、糾弾する北南仏教徒共同声明を平壤で発表。
- 8.14 朝鮮赤十字会の張在彦委員長が南朝鮮の赤十字社の柳宗夏総裁に韓相烈牧師の帰還を 20

日に変更との通知文を送付。

- 8.15 リヒテンシュタインのアロイス・フォン・ウント・ツー・リヒテンシュタイン皇太子と徐世平同国駐在朝鮮大使が会見。
- 8.15 最高人民会議常任委員会の金永南委員長、ロシア連邦代表団(団長:朝露政府間貿易・経済・科学技術協力委員会ロシア側委員長であるビクトル・バサルギン地域発展相)と平壤で会見。
- 8.15 朝露政府間貿易・経済・科学技術協力委員会の朝鮮側委員長である李竜男貿易相と朝露政府間貿易・経済・科学技術協力委員会ロシア側委員長であるビクトル・バサルギン地域発展相が平壤で会談。
- 8.15 6.15 共同宣言実践北・南・海外委員会(6.15 民族共同委員会)、祖国解放 65 周年に際して国内外の全同胞に送るアピールを発表。
- 8.16 朝鮮最高人民会議常任委員会の楊亨燮副委員長、中国青年親善代表団(団長:中国共産主義青年団の周長奎書記)と平壤で会見。
- 8.16 盧斗哲副総理、表敬訪問したラオスのソムサワット・レンサワット副首相と一行と平壤で会見。
- 8.16 武大偉中国政府朝鮮半島問題特別代表一行が朝鮮を訪問。(～18 日)
- 8.17 朝鮮の盧斗哲副総理とラオスのソムサワット・レンサワット副首相が平壤で会談。
- 8.19 金永南委員長と南朝鮮の韓相烈牧師が平壤で会見。
- 8.19 朴宜春外相、表敬訪問したゲルハルト・ティーデマン駐朝ドイツ新大使と会見。
- 8.19 金永南委員長、ラオスのソムサワット・レンサワット副首相一行と平壤で会見。
- 8.21 中国を訪問する朝鮮政府科学技術代表団(団長:国家科学技術委員会の李子方委員長)が平壤を出発。
- 8.25 金永南委員長、表敬訪問した米国のジミー・カーター元大統領と一行と平壤で会見。
- 8.25 中国人民解放軍瀋陽軍区代表団(団長:張又俠司令員[中将])が平壤に到着。
- 8.26 朝鮮国防委員会委員長である金正日朝鮮労働党総書記、中国国家主席である胡錦濤中国共産党中央委員会総書記の招請により中国を非公式訪問。(～30 日)
- 8.27 朝鮮労働党代表者会の代表者選出のための朝鮮労働党の朝鮮人民内務軍、内閣、鉄道省、文化省の代表会。
- 8.27 朝鮮人民軍総政治局の金正角第 1 副局長、ベトナム人民軍政治活動家代表団(団長:ゴ・スアン・リッチ総政治局副主任[中将])と平壤で会見。
- 8.28 ハイズオン市でベトナム朝鮮親善協会ハイズオン省委員会第 2 回大会。
- 8.29 「韓日合併条約」公布 100 年に関連して 6.15 共同宣言実践民族共同委員会の北側委員会と南側委員会、海外側委員会が声明を発表。
- 8.30 金永南委員長ベトナム人民軍政治活動家代表団(団長:ゴ・スアン・リッチ総政治局副主任[中将])と平壤で、会見。
- 8.31 金永春人民武力部長[次帥]、中国人民解放軍瀋陽軍区代表団(団長:張又俠司令員[中将])と会見。
- 8.31 ジュネーブ軍縮会議の総会で朝鮮代表、世界の平和と安全保障で核軍縮を抜きにした拡散防止は無意味であると演説。
- 9. 3 マリのモディボ・シディベ首相が同国駐在朝鮮大使と会見。
- 9. 4 中国の 2010 年上海万博の朝鮮館の日の行事に出席する朝鮮政府代表団(団長:黄鶴源都市経営相)が平壤を出発。
- 9. 8 エジプトのムハンマド・ホスニ・ムバラク大統領特使である大統領官房室カリム・アッ・ディワニ書記が共和国創建 62 周年に際し、エジプト駐在朝鮮大使館を祝賀訪問。
- 9.10 第 2 回朝中大学学長フォーラムに参加する中国教育省代表団と中国大学代表団(11 校から成る)、各省、市の国際友好連絡会の活動家を網羅した中国地方国際友好連絡代表団が平壤に到着。
- 9.10 朝鮮民主主義人民共和国赤十字会の張在彦委員長、南朝鮮赤十字社の柳宗夏総裁に通知

文を送り、秋夕(チュソク、旧盆、今年は9月22日)に際して金剛山で離散家族・親せきの対面を行うための北南赤十字関係者の実務接触を提案。

- 9.13 朝鮮で第7回平壤国際科学技術図書展覧会。
- 9.14 米国のバージニア大学物理学教授の李承憲氏とカナダのマニトバ大学博士のヤン・パンソク氏、南朝鮮国防部が公開したチョンアン沈没事件の最終報告書の不当性を指摘。
- 9.14 朝鮮人民保安部代表団とラオス治安維持省代表団が平壤で会談。
- 9.15 金永南委員長、ラオス治安維持省代表団(団長:ラオス人民革命党書記のトンバン・センアボン治安維持相)と平壤で会見。
- 9.15 崔泰福書記、オーストリアのザンクトポルテン市委員会代表団(団長:同国社会民主党連邦指導部メンバーで同党ザンクトポルテン市委員会のアントン・ハインツル委員長)と平壤で会見。
- 9.16 板門店で第5回朝米軍部大佐級実務接触。
- 9.16 第65回国連総会に参加する朝鮮代表団(団長:朴吉淵外務次官)が平壤を出発。
- 9.17 開城で北南赤十字実務接触。
- 9.17 朝鮮で第12回平壤国際映画祭。(～24日)
- 9.18 米国カリフォルニア大学教授で同大学国際紛争・協力研究所のスーザン・シャーク所長一行が平壤に到着。
- 9.20 中国国家林業局代表団(団長:陳述賢副局長)が平壤に到着。
- 9.21 マリのアマドゥ・トゥマニ・トゥーレ大統領が李京善同国駐在朝鮮大使と会見。
- 9.22 東北アジア電話通信会社第27回理事会に出席するタイ・ロクスレー・パシフィック社代表団(団長:タイ・ロクスレー社執行副社長のジンジャイ・ハンチャンラシュ氏)が平壤に到着。
- 9.23 最高人民会議常任委員会の政令により姜錫柱氏を副総理に任命。
- 9.23 最高人民会議常任委員会の政令により金桂官氏を第1外務次官に、李容浩氏を外務次官に任命。
- 9.23 米国のビル・リチャードソン・ニューメキシコ州知事の上級補佐官であるクン・アンソニー・ナムン氏が平壤に到着。
- 9.24 中国司法代表団(団長:張蘇軍司法次官)が24日、平壤に到着。
- 9.24 平壤で東北アジア電話通信会社第27回理事会。
- 9.24 開城で離散家族・親せきの再会のための2回目の北南赤十字実務接触。
- 9.24 崔泰福書記、ラオス人民革命党対外関係委員会代表団(団長:トンシ・インタポン副委員長)と平壤で会見。
- 9.24 キューバ共産党のフィデル・カストロ・ルス第1書記、同国を訪問している朝鮮外務省代表団(団長:金衡俊次官)と会見。
- 9.25 朝鮮最高裁判所代表団と中国司法代表団が平壤で会談。
- 9.26 朝鮮労働党代表者会に出席する代表者が平壤に到着。
- 9.27 金正日最高司令官、朝鮮人民軍指揮メンバーの軍事称号を昇格させることに関する命令第0051号を下達。
- 9.27 崔泰福書記、英国共産党(マルクス・レーニン主義)代表団(団長:ゼイン・カーペンター書記長)と平壤で会見。
- 9.27 第65回国連総会の会期中に行われた非同盟諸国会議の年次外相会議で朝鮮代表団団長の朴吉淵外務次官が演説。
- 9.27 ニカラグアのサンディニスタ民族解放戦線(FSLN)党首のホセ・ダニエル・オルテガ・サーベドラ大統領、朝鮮外務省代表団(団長:金衡俊次官)と会見。
- 9.29 朴吉淵外務次官、第65回国連総会での演説し、朝鮮半島平和と安全を守る全責任果たすと強調。
- 9.30 板門店の南側地域で北南軍事実務会談。
- 9.30 金永南委員長、離任のあいさつに訪れたジャマル・アッディン・グリーン駐朝アルジェリア大使と平壤の万寿台議事堂で会見。
- 9.30 朝鮮労働党代表団(団長:朝鮮労働党政治局委員の崔泰福書記)が中国訪問のため平壤を出

発。

- 9.30 朝鮮労働党代表団と平和と社会主義のためのフィンランド共産主義労働党代表団が平壤で会談。
- 10. 1 中国を訪問中の崔泰福書記、中国共産党政治局員で書記局書記の劉雲山宣伝部長と北京で会見。
- 10. 1 開城で行われた北南赤十字実務接触で北南双方、離散家族再会を 10 月 30 日から 11 月 5 日まで金剛山面会所で行うこと、そのための北南赤十字会談を 10 月 26、27 日に開城で行うことに関する合意書を採択。
- 10. 2 中国共産党総書記の胡錦濤国家主席、中国訪問中の朝鮮労働党代表団と北京で会見。
- 10. 2 朝鮮の名勝地総合開発指導局、北南当局間実務会談を開くことを提案する通知文を南朝鮮統一部に送付。
- 10. 4 6.15 共同宣言実践民族共同委員会の北側、南側、海外側委員会が決議文を発表。
- 10. 5 板門店で第 6 回朝米軍部大佐級実務接触。
- 10. 9 朝鮮を公式親善訪問する中国共産党代表団（団長：同党中央委員会政治局常務委員の周永康中央政法委員会書記）が平壤に到着。
- 10. 8 楊亨燮副委員長、朝鮮労働党創立 65 周年に際して朝鮮を訪問している英国の AP テレビジョン・ニュース（APTN）代表団（団長：ナイジェル・ベーカー執行局長）と平壤で会見。